

Antonin Raymond

レーモンド展示コーナーとレーモンド建築の痕跡

ライネルス中央図書館1階エントランスラウンジに設置されたレーモンド展示コーナーには、南山アーカイブズと連携したレーモンド建築に関する展示が常設されており、2015年のQ棟・リアンの新築から始まり、レーモンド・リノベーション・プロジェクト、2023年のライネルス中央図書館計画を経て、長期間にわたりレーモンド建築の再生保存を取り入れながらキャンパスを継続的に成長させている様子が紹介されています。

図書館の各所にも、レーモンド建築の様々な痕跡が紹介されています。中央階段のタイルは竣工時から残るもので、各階で異なるストライプ柄となっており、創建当時の姿をそのまま現しています。また、入退館ゲートの上、特徴的な天井デザインはレーモンドの設計による菱目型の梁です。書架がどのように置かれてもその重量が梁にうまく伝達される構造となっており、機能とデザインが一体化された合理的な設計です。さらに正面出入口には、プレキャスト工法で作られた知識の泉に似せたモザイク壁画、その向かい側のレトロなコンクリート階段の手すりには円形の穴があることにお気づきでしょうか。これも全てレーモンド建築の一端なのです。

是非この機会に、普段は通り過ぎていた図書館のスポットに、少し足を止めて鑑賞してみてください。



右の図書館の前庭の写真は竣工当時。上南戦の結団式を行ったり、学生の憩いの場として活用されたりしていたという記録があります。



2024年現在(左)と1979年ごろの増築直前(右)の様子

編集後記

表紙の写真

なぜ図書館前の芝生に椅子?と思ったみなさん、レーモンド氏の妻ノエミ・レーモンドのデザインと伝えられている椅子が、レーモンド建築である図書館を万感の想いをもって臨む構図です。

「デュナミス」ってどんな意味?

ギリシャ語で「力」「可能性」をあらわしています。1990年刊行の第6号で「オシャレで親しみやすいタイトル」を募集し、1991年刊行の第8号で決定したものです。

本誌掲載写真のAは南山アーカイブズ所蔵、Lは図書館事務室撮影



Contents

特別号 図書館とAntonin Raymond

- P. 2 図面に見るレーモンドの設計思想 紅露 剛
- P. 4 南山大学と歩んだ62年を思う 宮川 佳三
- P. 6 Antonin Raymond: 本人に一度も会っていない者の若干の回想 Peter Knecht
- P. 8 レーモンド展示コーナーとレーモンド建築の痕跡・編集後記



図面に見るレーモンドの設計思想

紅露剛 図書館事務室

Contents 1

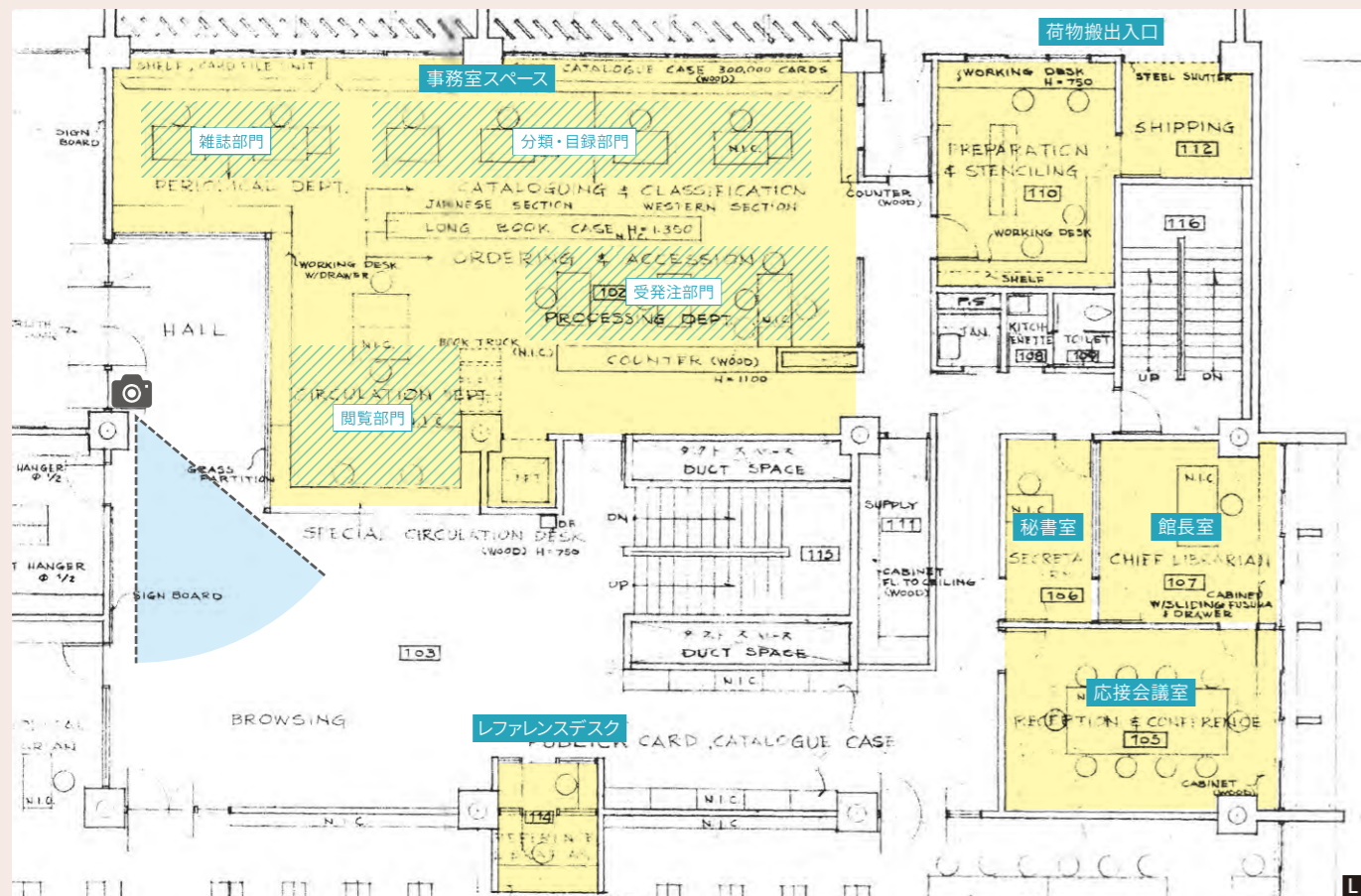
はじめに

南山大学は、2024年に現在の山里キャンパスに移転後60周年を迎え、学内で「Yamazato60プロジェクト」と題して様々な記念企画を催します。そこで、南山大学ライネルス中央図書館でも、山里キャンパス60周年を記念した図書館報「デュナミス」の特別号を出すこととしました。

特別号では、初めに、チェコ生まれの米国人建築家アントニン・レーモンド (Antonin Raymond, 1888-1976) が山里キャンパスの総合計画の一環としてデザインした本学図書館 (1964年竣工) の設計上の特色について、図書館1階エントランスラウンジ「レーモンド展示コーナー (裏表紙の解説参照)」で展示中の図面集 (以下、図面集) ^{注1} をもとに、筆者が解説します。

次に、山里キャンパスに移転する当時、南山大学の学生であった南山大学名誉教授宮川佳三氏、1966年の来日以降、南山大学や神言神学院などレーモンドが設計した建物と深くかかわってこられた元南山大学人文学部教授 Peter Knecht 氏の思いもお伝えします。

注1: 南山大学創建時1964~1967アントニン・レーモンド設計図面集。[複製]、[68枚]。南山大学図書館がライネルス中央図書館へリニューアルされたことを記念して大林組から贈られたもの。竣工した図書館とは違う箇所があることも含め、大変興味深いものとなっています。



1階の図面の一部。閲覧部門から離れた位置にレファレンスデスクがあるのが判る。

レーモンドの山里キャンパスをデザインする上での基本的な原則

山里キャンパスを構築するにあたりレーモンドは「事物の核心に至り、すべてを取り去ることが力強い表現への道に通ずる。〔中略〕名古屋の南山大学で、私は日本のデザイン哲学からひき出された原則を〔中略〕きびしく採用していった。〔中略〕はじめて敷地を訪れた時でさえも、私はきわめて魅力的なその風景と草木を、できる限りそのまましておかなければならないと考えていた。」¹とあります。

そして、「世界中いたるところにある陳腐で、平凡で、つまらぬ、無意味かつ偽りをそのままあらわしたような広場、柱廊、広い階段その他もろもろの金のかかった虚飾だらけの大学とはまったく異なる、日本のデザインの哲学をそのまま具体化したような大学の建物をつくるのだ。」²と述べています。

この原則に基づき、山里キャンパスは自然環境に極力手を付けずに生かした設計が施され、本学図書館も、その原則に則り、斜面上にデザインされました。

また、レーモンドは本学図書館を設計するにあたり、自ら先に設計した国際基督教大学 (以下ICU) 図書館 (1960年竣工) を参考にしています。これには、「大学図書館の設計に行き詰りができたとき、レーモンド氏がさきに設計した国際基督

教大学図書館のことを聞いて、ボルト師は東京都三鷹市へ赴き、詳しく見学し、写真も撮って帰られた。斯くして、ICU図書館を模範として、開架式をはじめ、新しい立派な設計ができることとなった。」³とあるように、当時の南山学園理事長アルベルト・ボルト師 (1908-1990) の寄与がありました。

図面に見る本学図書館の設計上の特色

ここからは、実際に図面集の中から特に特徴的な部分をピックアップし、そこから読み取れるレーモンドの図書館設計の特色について紹介します。

特徴1. 動線の重視と機能的なレイアウト

レーモンドの図面には、人の動線を重視し、機能的なレイアウトを意識していることを強く感じさせる部分があります。

例えば、1階の事務室周りの図面 (p.2図面参照) では、正面玄関を入ってすぐのところに閲覧カウンターがあり、そのすぐ横に受入部門のカウンター、事務室内奥には雑誌の担当者と分類目録の担当者のデスクを配置、という風に、その場所に配置すべき人・モノの要素と流れが明確に整理され、描きこまれています。これは、現在の目から見ても機能的で使いやすいレイアウトに感じます。さらに、事務室の隣にはスチールシャッター付きの荷物専用搬出入口が正面玄関とは別に設けられ、隣接する図書館長室、館長秘書室、会議室は動線を考慮した緊密な配置となっています。この事務室の設計図からは、レーモンドが図書館業務を良く研究し、熟知していたという印象を受けます。

設計上の機能重視のもう一つの特徴的な事例として、1階閲覧室内に独立して配置されたレファレンスデスクの存在が挙げられます。図書館のレファレンスデスクは、閲覧カウンターに隣接させて配置するのが通例であるのを、敢えて少し離れた閲覧室内に切り離して置いたところに、レーモンドのこだわりを感じます。その評価は分かれると思いますが、図面からは「レファレンサーは、できるだけ利用者の近くに置きたい」というレーモンドの声が聞こえてくるようです。事務室の無いフロアの閲覧室に図書館員の待機場所が1席ずつ確保されているのも、同様の配慮ではないかと思われます。

特徴2. 複合施設としての機能の実現

1964年竣工当時の図書館は「図書館+博物館 (人類学展示図書室 (陳列室))+音楽図書室 (ミュージックホール)+学生クラブ室」という、多目的型の複合施設となっていました。これが実際に今というMLA連携^{注2}のような効果を狙ったものかどうかは不明ですが、その先駆けともいべき環境を当時すでに実現していたのは、注目に値するのではないのでしょうか。

注2: MLA連携: 博物館 (Museum)、図書館 (Library)、文書館 (Archives) の間で行われる各種連携・協力活動のこと。MLA collaboration.



1階玄関ホールから閲覧カウンターを眺む。奥には、ブラウジングコーナー、目録カードボックスが見える。

特徴3. オリジナル家具へのこだわりと日本文化へのリスペクト

レーモンドは、本学図書館のために多数のオリジナル家具を設計しています。その中には、利用者用のキャレル、椅子、ソファ、テーブル、資料閲覧用の雑誌・新聞用ラック、辞書用書見台、パンフレット用スタンド、マイクロフィルムキャビネットなどのほか、業務用のブックラック、タイプライター台、目録カードボックスなど、大小様々なものが含まれています。

今回、図面集で1階の家具類を確認中に、興味深い事実を発見しました。家具の近くに書き込まれた「W/SLIDING FUSUMA」の文字です。いうまでもなく「SLIDING FUSUMA」とは、日本の襖を意味していると考えられます。この閲覧室と館長室の襖付き家具は、日本文化を重んじた、いかにもレーモンドらしい趣向であると感じます。

おわりに

以上、レーモンドの図面集をもとに本学図書館の特色を見てきました。図面からは、レーモンドの大学図書館の設計に対する造詣の深さ、図書館と種類の異なる複数の施設を一つの建物に融合させる柔軟な発想、図書館の家具をデザインすることへの並々ならぬ情熱を感じました。レーモンドは図書館の設計に関しても、信念に基づく緻密な計算と大胆さを兼ね備えた、優れた建築設計家 (アーキテクト) であったと思います。本学が、このような人物に図書館の設計を託せたのは、非常に幸運だったのではないのでしょうか。

本稿をお読みになって関心を持たれた方は、ぜひ図書館1階のレーモンド展示コーナーで図面集を直接ご覧いただき、レーモンドが本学図書館に対して抱いていた思いに想像を巡らせてみてください。

【引用文献】

1. アントニン・レーモンド著、三沢浩訳。自伝アントニン・レーモンド。鹿島研究所出版会、1970、p.258。
2. アントニン・レイモンド。日本建築への帰依。芸術新潮。1964.8、Vol. 15(8)、p.78。
3. “36 校舎の設計や建築とボルト師 (松風誠人談) 1963年11月27日”。アルベルト・ボルトと南山学園。南山大学史料室編。南山学園、2010、p.33-34、(南山学園資料集、5)。

【参考文献】

伊藤真司。“南山大学の家具デザイン”。南山学園のレーモンド建築: 下。南山大学史料室編。南山学園、2014、p.86-89、(南山学園史料集、9)。

南山大学と歩んだ62年を想う

宮川 佳三 南山大学名誉教授

Contents 2

初めに

しばらく前から始まっていた南山大学レーモンド・リノベーション・プロジェクトが南山大学創立75周年記念ライネルス中央図書館構想による図書館整備をもって完了し、アントニン・レーモンド氏の設計による山里キャンパス60周年を迎えることになり、長年大学と係わってきた一人として大変嬉しく思います。

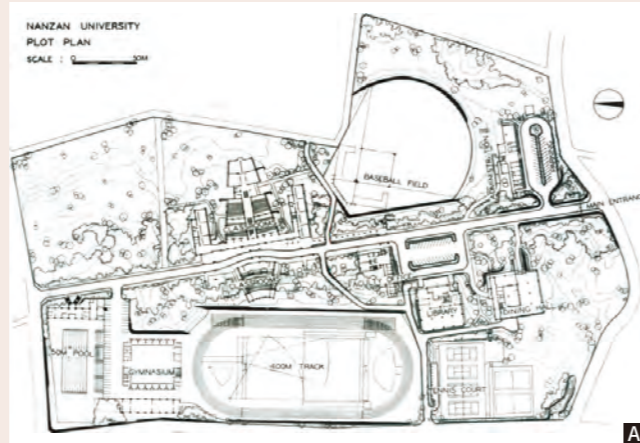
そのことはまた後で取り上げるとして、私の最大の関心事である「戦争と平和」の話から始めたいと思います。この原稿を書いている2024年8月、広島と長崎の原爆投下、そして多くの日本人が「敗戦の日」と受け止めている8月15日を今年も辛い気持ちで私は回顧し、追悼しています。79年目の8月です。幸いなことに、この79年間日本が再度戦争という暴力から自由であり続けたことです。何が幸いしたのかを私たちは考えなければなりません。「先の戦争」の当事者・国として、二度と戦争はしないとの強い気持ちを79年もの長い時間持ち続けたことの自然な結果なのでしょう。答えは簡単には出ないでしょう。が研究・教育にかかわる南山大学の「丘の上の共同体」が取り組まなければならない課題だと私は思っています。さらに言えば、戦争は南山大学の「人間の尊厳のために」にふさわしくはないと言わせてください。

私と南山大学の関係の始まり

1950年代は私にとっては小学校、中学校、高等学校の時代でした。この十年間で私は「戦争と平和」の課題に少しずつ関心を持ち始め、自分の将来の仕事を選び付けて考え始めていました。外交官とか国際ジャーナリストを漠然と考えていました。それには先ずは英語をと思うようになりました。その頃は名古屋に住んでいたため、「語学の、英語の南山」の評判を耳にしていました。高校で英会話の先生(米国人)がたまたま南山大学のESSが発行の英字新聞『Nanzan Mirror』を紹介してくれました。このことが決定的に私の南山大学入りの決め手になりました。気持ちはもう南山大学に入学したも同然でした。購読していた英語に関する雑誌のグラビア写真にアメリカの「Liberal Arts College」の写真がよく出てきたのを覚えています。そういう環境で学びたいと心のどこかで思っていたのです。特に自然の豊かなキャンパスに。なによりも「Liberal Arts College」の意義に魅了されていました。英語とリベラル・アーツ教育と自然のコンビネーションを意識していました。

1964年：新しい学びの環境・山里キャンパス：「丘の上の共同体」へ

いよいよ新しいキャンパスの開設の時1964年の4月が来ました。その時私は『Nanzan Mirror』の編集長をしており、開設を記念して、特集号を発行することを決めていました。タブロイド判4ページです。そのためもあり、前年の12月中旬に予定されている場所を訪れていました。林中から歩き始めました。敗戦後20年近く経っていたのですが、開発はそれほどなされていませんでした。かつては陸軍の高射砲陣地として使われていた起伏のある丘陵地であったと土地の人から聞かされました。確かにその面影は十分残っていました。その場所を今「平和の丘」に変えようとする南山学園は考えているのか、ととっさに思いつきました。「戦争の丘」からです。大きな時代の、それも敗戦から20年経ての、変化です。敗戦から20年の時間の大きな変化を自分なりに受け止めていたように、今改めて想います。「平和の文化」のための教育へ大学は向かうのか、とさえ思いました。



山里キャンパス移転時の航空写真と、当初のプロット図

1964年：南山大学のさらなる飛躍へ

新しい時代が始まりました。1964年4月。二年間の五軒屋町のキャンパスからの移転です。学びの環境の革命的な変化でした。私個人にとっても大きな変時になりました。そうそう日本にとってもね。1964年は確かに大きな節目の年になりました。

新しいキャンパスは南山大学の特徴を見事に表現したものに思えました。世界的に知られた建築家の建築理念が生み出したキャンパスだと後に知りました。私の目の前にあるキャンパスはあのグラビア写真のアメリカのカレッジを思い出させてくれるものでした。豊かな自然の中に見事に溶け込んだ建物と若者たちを重ねていました。そして何気なくある時から思ったことですが、この地は「丘の上の共同体」になるのではないかと。二年生の時のアメリカの政治に関する講義の中で、恩師・梁田長世先生がふと漏らした「丘の上の町」という植民地入植を前に宗教指導者が語った、聖句「マタイによる福音書」第5章13節から16節を引き合いに出し、アメリカの世界観の基礎にはこのような考え方「丘の上の町」があるとして解説しました。そのことを何気なく思い出し、新しいキャンパスを「丘の上の知の共同体」と思うようになりました。それから60年経った今もその見方は変わっていません。

確かにキャンパス設計にはレーモンド氏の理念が見事に反映されていました。人間の活動の場は自然と調和しなければならない、と彼は考えていたと言われています。起伏のある土地をいかに生かすかに彼は取り組み、丘の最も高いところを生かし、メインストリートにし、その左右の傾斜地をそのまま生かしたと思われる。そのいい例はG棟にあります。あらためてG棟を見てください。G25、G26、G27、G28の勾配のきつい教室となだらかな勾配のG30教室を見てください。G30教室の入り口の壁に、目をやってください。レーモンド氏が描いた絵と言われています。彼の願いが、祈りが、見事に描かれていると思われる。その他の建築物も同じように自然が生かされています。

図書館の整備にも大きな変化がもたらされていました。図書資料の配架がすべて閉架式であったのを開架式に変えたことでした。レーモンド氏の考えであったかはわかりませんが、私の推測するところでは、アメリカの大学の図書館の在り方を導入したのではないかと思います。私が知っているアメリカの大学の多くの大学図書館は開架式で、私はその便利性・効率性を享受してきました。とにかく大学にとって図書館は大学の顔と言ってもいいと思います。山里キャンパスは、大学の図書館の役割に大きくこたえようとする姿勢は見ていました。

1964年の前年には、学部学科が増設されました。文学部に加えて、二学科の外国語学部が新たに増設されたことは南山大学を大きく変えたと思います。私は3年次から英米科の学生になりました。英米の政治・経済・社会・文化と学問の幅が広がりました。この新しい学科の新設は、私の関心の幅を広げてくれました。「英語」を超えた新しい学問の道を開いてくれたことです。

この新学科の新設に加えて私に刺激を与えてくれたのが「NBN(現名古屋テレビ【メ〜テレ】)のアメリカ研修旅行プログラム」による二か月のアメリカ研修旅行でした。アメリカの主要な都市・地域を約二か月かけて訪れ、観察するというものでした。余談ですが、この旅行中に『Nanzan Mirror』を紹介してくれた先生にAtlanta市にあるEmory Universityで会うことが出来ました。

兎に角1964年は私にとってとても大きな変化の年になりました。新たな出発として大学との関係は深まり、研究・教育の両面でより意味のある年月を過ごし、今日まで、大学との関係を「名誉教授」として在籍を許され、有難いことに、第1研究室棟一階に研究室を用意してもらい、時折渡り廊下を使い(時々立ち止まって沈んでいく太陽を見ることがあります)図書館で資料の閲覧や貸し出しをさせてもらっています。



1964年2月、キャンパス西側から図書館と第1研究室棟を向いて撮影した写真

終わりに

回顧することがあまりにも多くあり、長い書き物になってしまいました。これまでの長い62年の南山大学との関係を改めて振り返ってみて、感慨を深めています。

60年を超えて南山大学がさらに発展・成長し、「人間の尊厳のために」を意識して、「丘の上の知の共同体」として多くの人に愛されるようになってもらいたいと祈っています。

Antonin Raymond: 本人に一度も会って ない者の若干の回想

Peter Knecht 元南山大学人文学部教授

Contents 3

恵比寿の家

真夜中に近い時刻、1966年の秋に羽田空港に到着した。予定より数日早く到着したので、出迎いを頼んでいた友人がいなくて、とりあえず空港のホテルで一夜を明かした。翌朝に電話したら、彼は昼少しすぎに来て、筆者を恵比寿の神言会修道院へ案内し、その院長と住人らに紹介してくれた。

与えられた部屋は三階建て鉄筋コンクリートの洋館の三階にある一室であった。戸を開けて一歩入ってみると、大いに驚いた。柱と天井の梁が裸のコンクリートできていて、壁は木製のパネルで覆われていた。机をはじめ、家具はすべて木製のものだった。入った途端に、寂しい部屋だなという印象をめぐえなかったが、南側の大きな窓は外の景色を遠慮なく室内に流れ込ませた。気をつけて見ると、コンクリートの柱などにラフなところがなく、まるで切ったばかりの木のように節と木目を残して、肌のようにスムーズな感じのものだった。

この窓の前には緑豊かな庭があり、大きな木の下に草とコリが自由自在に生えていた。しかし、こうした大自然の中のあちらこちらに古い墓石が見え隠れしていた。大都會のど真ん中にある自由なこの不思議な場所に一目ぼれした。この魅力的な世の一角をレーモンドが用意して下さった。彼の作品のなかで目立たないものかも知れないが、筆者に言わせるなら、彼の作品全般に通ずる基本的なメッセージがここにも表れている：大自然と人間が作った創造物が互いに存在し合えるというものだろう。

南山大学そして図書館

1978年に筆者は南山大学文学部人類学科の非常勤講師として雇われた。大学は山里新キャンパスへ移転して、大学紛争が一応収まっていた。その頃、人類学民族学研究所(以下「研究所」)は人類学科とともに第1研究棟の最上階にあったが、休止中であったため事務取扱所長のポストのみが作られた。図書館と第1研究棟はレーモンドの総合的デザインによって渡り廊下でつながれ、研究者は楽に図書館へ行くことができた。研究所にあった考古学資料は新しい図書館の三階に移されたが、専門誌以外の蔵書は研究所としての所蔵は廃止され、本は図書館の一般蔵書に入れられた。この蔵書には、台湾原住民の語学研究の専門家であり、1954年に研究所の東ニューギニア学術調査団の団員であった浅井恵倫、台湾の大学で教えていた小川尚義の両先生の研究著書なども含まれていた。沼澤文庫が設立された後に、浅井と小川両先生の資料を探し確かめる依頼が東京外国語大学の

アジア・アフリカ言語文化研究所と台湾の中央研究院 言語研究所からあった。それに応えて、研究所が図書館の協力を得て、この資料を整理し依頼者と共有した。

研究所が編集刊行していたAsian Folklore Studies誌の創刊者兼長年の編集長であった M. Eder 先生の死後、彼の残した著書などが研究所で「エーデル文庫」の名目で図書館の力を借りてまとめることができた。この蔵書の一部はエーデル先生が北京輔仁大学のFolklore Studies編集室から日本へ持ち込んだ漢書資料だった。ところがエーデル文庫が整理された後のある日、漢書がことごとく消えていることに気付いて、受けたショックを筆者は覚えている。幸いに、当時の研究所のコピー・エディターが図書館の書庫で調べものをしていたら、筆者に電話で、「消えた漢書が置かれている箇所を発見したよ!」と嬉しい知らせをくれた。資料を早速研究所の図書室へ戻してもらった。後に、慶應義塾大学の専門家が図書館の漢書を整理した際に、エーデル文庫の漢書のまとめと登録をお願いできる機会があった。

神言神学院聖堂

レーモンドは南山大学だけではなく、隣接する神言神学院の会員共同体の住居と聖堂も設計した。西側の道路から聖堂を眺めると、その空間をコンクリートの壁が輪のように囲っている。道路から短い階段を下りれば、手前でやや広くて明るい大聖堂に入る。しかしこの入り口の前の、右へ下がるかなり急で狭い階段を降りてみると、昼でも薄暗い地下聖堂に入る。ここでは、信徒の席が半輪を描き、祭壇に向かっていて、つまり、祭壇を抱くように両脇まで並んでいる。従って、礼拝に集合した信徒は祭壇と司祭を輪のように囲む形となる。

この聖堂は、建物の礎石の記によると1966年にできたので、第二バチカン公会議で決められた新典礼法にかなっていると思えるが、実は、レーモンドの考えはもっと古くて、既に1940年代にPaul Claudelとの会談へ遡る。Claudelがシカゴ市でこうした形の地下教会を考えている話をレーモンドにしたばかりでなく、その青写真も作ってみるよう頼んだとレーモンドは自伝で記している^注。Claudelの考えでは、この教会で、信徒はやかましい世俗界から離れ、薄暗い空間に潜り込んで、その静けさの中で神に出会える、とある。

さらにレーモンドは、自分の基本的考えを自伝のなかで以下のように明らかにしている。はじめて南山大学建設予定地を訪れた時、「私はきわめて魅力的なその風景と草木を、できる限りそのままにしておかなければならないと考えてい

た。」¹そして、この与えられた枠中で、自由に建物を造りあげた「その結果、教室群、図書館、食堂等、前例に頼らず、現代的機能と要求とを強調し、新しい形をつくり解決したのである。」²と述べている。

神学院の聖堂は上記のデザインから少し離れているが、レーモンドのこの考えと意図に従っている。

振り返ってみると、レーモンドは南山大学のキャンパスで、知識の優れた泉の器(図書館)だけではなく、精神を鎮める器(神学院聖堂)をもデザインして、我々に提供しているのではないかということに気がつき驚いて、有難く思っている。

注 この会談が「1940年代」に行われたとはレーモンドの記憶によるものと推測されるが、Claudelが1926年に発表した提案が種になっている。レーモンドが「自伝」の中でClaudelのこの考えを紹介し、自分が書いたデザインをつけて発表している。

【引用文献】

- 1 アントニン・レーモンド著.三沢浩訳.自伝アントニン・レーモンド.新装版, 鹿島出版会,2007,p.258.
- 2 アントニン・レーモンド著.三沢浩訳.自伝アントニン・レーモンド.新装版, 鹿島出版会,2007,p.259.

【参考文献】

- Claudel, Paul Claudel, Paul, *Projet d'une église souterraine à Chicago, Positions et propositions*, In *Oeuvres Complètes de Paul Claudel, vol. 15*, Paris, Gallimard, 1959, p. 294-303.
- A. Raymond, Antonin Raymond: an autobiography Rutland, Vt.: C.E. Tuttle, 1973.
- アントニン・レーモンド.三沢浩訳.自伝アントニン・レーモンド.新装版, 鹿島出版会,2007.

Photo Gallery



1964年の竣工時に撮影されたと思われる写真。現在の様子と異なり、地上階部分も開口が多く設けられている。



1980年の増築前は、高低差のためにエントランスには橋が架っていた。



図書館棟には、1982年まで人類学博物館があった。



増築前の閲覧室。天井に見える菱目型の特徴的な梁形状と、今号の表紙にも登場した印象的なオリジナルデザインの家具が並んでいる。



図書館と第1研究室棟をつなぐ渡り廊下。床に配された菱柄のデザインは当時のままである。



本部棟側から見た図書館。エントランス前は駐車場だった。



図書館前の駐車場では、第11回上南戦結団式(1970年)が行われた。